

アントロポゾフィー看護を学ぶ 看護職の会 会報 2019 夏号

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会会員の皆さま

暑中お見舞い申し上げます。

「会報」夏号をお届けいたします。

今回の会報は、2018年12月16日、すみれが丘ひだまりクリニックにて行われました、岩橋亜希菜氏による公開講座「いきることそして進化に関わる環境としての建築～病気と関わる空間を考える～」の記録起こしをした原稿を、講演者の岩橋さんご本人が会員の皆さんが読みやすいように、書き直して下さった内容になります。岩橋さんのお話は、「看護とは何か、病気とは何か」建築を通して私たちに問いかけてくださっています。

今回の夏号では前半部分をお届けし、秋号で後半部分をお届けいたします。

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会 運営委員一同

アントロポゾフィー看護を学ぶ看護職の会

<http://www.anthro-nr.jpn.org/>

e-mail : anthro-nr@rel-int.jpn.org

会員の皆さまからの投稿を随時募集しています

いきることそして進化に関わる環境としての建築

～病気と関わる空間を考える～ 前半

講師 岩橋 亜希菜 氏

* 参加者は岩橋氏講演の前に、そよかぜクリニック(保険診療クリニック)とひだまりクリニック(自由診療クリニック、AnthroMed®認定クリニック)を見学させて頂きました。

* すみれが丘ひだまりクリニックの施設について <https://hidamari.yamamoto-kinen.or.jp/rooms/> をご参照ください。

* 文中の〈 〉は参加者の発言です。

※この原稿は2018.12.16のすみれが丘ひだまりクリニックにおける講演記録に、岩橋氏が加筆訂正してまとめたものです。

空間のシーケンス

さて皆さん、このクリニックへ患者さんはどこから入ってくるのでしょうか。正面の道路を通り、この風除室から入ってくるのですが、どなたかその印象、感覚体験を確かめた方はいらっしゃいますか？医療空間に於いて治療は既に入ってくるころからそれは始まると私は考えています。ここからのシーケンスを感じないとどういふ空間展開になっているかわからない。

ここ(ひだまりクリニックとそよかぜクリニックの間の風除空間)の天井を観察した人はいらっしゃいますか。どんな感じでしたか？

〈(参加者)空がある〉

この天井はトンネルアーチで、ブルー、白そしてピンクの左官によって夕焼け間近の空のような印象をつくっています。この施設の空間ではここだけが、言わば具象的空間となっています。外からみると四角い建物ではありますが、1層部分は煉瓦タイルとしています。硬い物質的なもののなかに参入すると、その上部が天に開くような感覚です。煉瓦のマッスという物質的で、閉ざされたような中に入ると、頭上解放され、さらにクリニックの門を開けると、別の意味で開かれた内部へと徐々に入っていくと感じられると思います。



医療法人社団 山本記念会

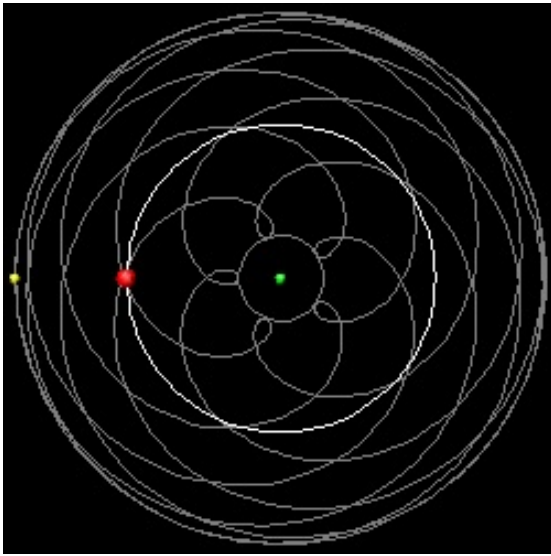
すみれが丘ひだまりクリニックホームページより

左：ひだまりクリニック入口 右：ひだまりクリニックレセプション

月・金星そして火星

先ず、そよかぜクリニックは、風除室空間に入ってから左回転して入口の扉を開けますと、その流れのまま自然にクリニックの廊下の流れに身をまかせ、レセプションカウンターに導かれ、同じ流れの中で待合室に辿り着きます。次に診察に向かうときには、今度は逆に回転して診察に入り、診察が終われば、再度方向転換して待合室にもどることになります。そして、今待合に向かった回転と反対の回転をしてカウンターに向かい、その流れのまま出口へ向かうこととなります。この動線の動きは、地球を中心とした金星の動きのメタファーとなっています。そよかぜクリニックは元々女性外来として計画されていたので、金星をモチーフとして設計されています。患者は、入口から入り、待機し、診察を受け、最後の事務処理を済ませ、クリニックの門を出るといふこの道程で金星の動きを追体験することになるのです。

もう一つ、このクリニックには月のモチーフも隠されています。月は水、そして銀の本質として現れる「写し取る」力として物質的には生殖の力と、そして霊的な方向としては「記憶」の働きと同等であり、生命の力でもあります。つまりここでは月の動きと金星の動きと共に体験するようになっています。



地球を中心とした金星の軌道

そよかぜクリニックは、保険診療の外来クリニックとして計画されましたので、その内装仕上材も一般的なものでつくられています。



図面 左:そよかぜクリニック 右:ひだまりクリニック

さて、2つあるクリニックのもう一方の「ひだまりクリニック」は、入口の扉をくぐると正面に凹面の円弧状の壁に直面し、その壁の流れに沿って方向を変え受付に行くこととなります。受付から、アントロポゾフィー医療の領域に向かうには、再度方向転換をしなければなりません。そして先ほどの円弧壁に沿って廊下を通り最奥になる待合に着き、診察に向かうためには、今歩いた回転とは逆回転して

診察室に入ります。ここでは先ほどの金星の軌道ではなく、それとはメノラーの関係にある惑星、つまり火星の動きは、花形の軌道を何年かかけてつくりまわります。ケプラーのプラトン立体による惑星の軌道モデルでは、外惑星の火星は正四面体、内惑星金星は正八面体、ちなみに地球は正十二面体となっています。

その一部のモチーフ。火星は金星に、金星は地球に恋していると言われる様に、火星と金星と地球の関係は複雑に絡み合っています。だからこそこれらの関係は(月も含めて)人間が受肉する際に大きな役割を演じていると良いでしょう。今、アントロポゾフィー医療がなぜとても大事になってきているかという、受肉の問題も含めて現代病をどう捉えるかという大事な問題にもなるが、私たちは地球期の、後アトランティス期の第五文化期に生きているわけですが、まず地球期を二つに分けてその前期を火星期、後期を水星期と考えることができます。つまり「火」と「水」という、相反するものが同時にあって、それをどのようにバランスを取るかが、私たち地球期に生きる者の課題であると見ることできるわけです。相反するもののバランスを取ることが自我のひとつの課題と考えると、なぜこの第五文化期に自我が活動し育とうとし始めるのかが見えてきますし、このことが非常に重要な意味を持つ時代でもあることが理解できると思います。ただ注意したいのは、第五文化期が「意識魂の時代」といわれますが、これは意識魂を育てる時代で、意識魂が出来上がっていて、それによって活動する時代ではない、ということです。これまでの文化期を通して私たちが育んだ「悟性」の力を使って活動するなかで、いかに「意識魂」を育てるかが課題となる時代、それが意識魂の時代と呼ばれる所以です。悟性魂は魂の領域のちょうど中央にあり、言わば自我はこの魂をその活動の場所として悟性を使いながら様々な出来事のバランスをとっています。その働きが大きいからこそバランスを崩す時代でもあります。欲求と使命、個と社会など

など、その関係に悩みながらもバランスをとり決断し行為に移す。そのような自我の働きを物質的に身体に伝えているものが血液と言えます。「血液は特別なジュース」というように、メフィストフェレスがファウスト先生の自我を呪縛する契約書の署名に血液を必要としたのです。

Leiden と Lust

ですので、ひだまりクリニック(アントロポゾフィー医療の空間)では、火星をモチーフとしています。何かに対峙した時に人はそれを意識し、行動に移します。先ず玄関扉を開けると何に出会いましたか、どんな壁でした？

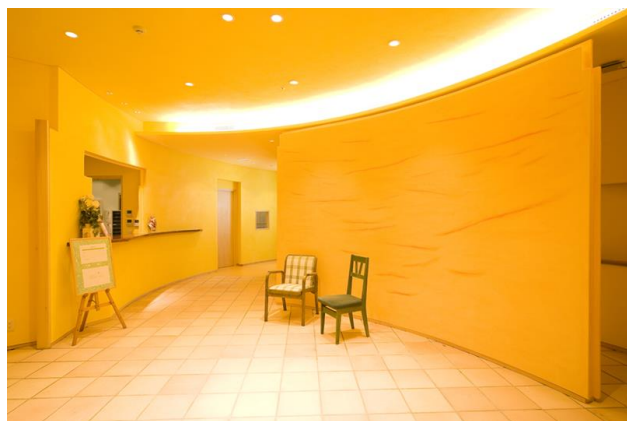
<一色じゃない>

<凹面で黄色より肌色に近い色に赤い色>

<夕日のよう>

<ひっかいたようで凸凹がある>

この少しオレンジがかかった凹面の壁の線模様は、実際に私がこの壁に下絵をかくて、それに合わせて、その上に左官してもらったものです。これは何か痛みを感じるような模様です。



ひだまりクリニック 入口正面の壁

ドイツ語では痛みを「Leiden (ライデン (痛み、苦難))」と言います。また Leiden に「-schaft」という接尾語を付けると、「Leidenschaft (ライデンシャフト)」、つまり激情、若しくは願望という意味になります。Leiden を考えるときは

Unlust (不快) との関係を考える必要があるわけですが。Lust は通常「快」と訳されますが、むしろ「・・・したい」と言った外に向けられる願望のようなニュアンスを持った言葉ですから、Unlust はその逆、「・・・気が乗らない」といったニュアンスです。

アントロポゾフィーではこの Lust と対概念の Unlust 並びに Sympathie とその対概念である Antipathie を2つの魂の大きな働きとしています。

痛みがある時は、オーラの中にオレンジ色が見えたりする。アントロポゾフィーの建築は、その似姿のようにしてある。まず、自分を感じましようということ。そよかぜクリニック(保険診療クリニック)はスムーズに入れる。ひだまりクリニック(自由診療クリニック AnthroMed®認定クリニック)は正面で壁にぶつかって、色も濃い。入ってきてびっくりする。例えばアルレスハイムのルーカス・クリニックは末期癌のための病院ですが、そのがん病棟の廊下はとても濃いオレンジ色の空間で、息ができないくらいに感じる空間です。ちょうどシンガポールに飛行機が着いて、タラップで外に出た瞬間のように、熱く蒸した布を顔にかけられたような感覚という想像しやすいかと思います。それは働いている看護師にとっては辛い空間かもしれません。しかし医療の空間とは、治療をしようとする意識を持った空間であり、治療のサポートをする空間でもなければなりません。このような暖色の空間は物理的にも体温を上げますし、意識的にさせてくれます。癌になると、体温が低くなってしまいますし、体温が3℃ほど上がると癌細胞は衰え始め、42℃になると癌細胞は死滅することがわかっています。つまりここが癌治療の空間として治療に寄与しようとしていると言えます。感覚に対する刺激をどう与えるか、つまり魂にどう訴えかけるかということが、ここでは問題になっています。アントロポゾフィー医療の場としてひだまりクリニックも、初めてこの空間に入るとき

い色、激しい色と思われるでしょう。アントロポゾフィーの建築というとゲーテアヌムの形態を手本として設計すれば良いと思われがちですが、そこで行われる事柄を目に見えない世界までも含めて考察し、そこから建築の姿を導き出すのがアントロポゾフィーの建築と言えるでしょう。ですので、この空間は当然ゲーテアヌムとは異なったものとなります。ゲーテアヌムはもちろん病院ではなく、言わば、アントロポゾフィーを空間的に体験するための建築です。惑星期をモチーフとした7本の柱があり、文化期の天井画が描かれています。観客席と舞台の造形が、ネガとポジの関係のように表現されていて、舞台のアーヒトラーフは霊的な場として凹面の彫刻、客席側のそれは凸面の彫刻として実体を表現するようになっています。私はあの空間に入ると、絶えず、右から左から話しかけられるようで、うるさくて居られないくらいに感じることもさえます。そのまま病院にしてしまったら、患者さんは苦痛で居られないでしょう。しかし Leiden(痛み)と Unlust とは関係があります。

「Lust」の対概念は「Unlust」で、「不快」と訳されて使われますが、例えば「～やりたくない」や「気分じゃない」という気持ちを表現する際に使う言葉です。逆に Lust は「～そんな気分だ」、「気が向く」といったニュアンスの言葉です。Lust は、気持ちの良いことに通じるので「快」と訳されますが、もう少しモチベーションの働くようなニュアンスです。好意的な感覚といった意味では、「Sympathie」「共感」に通じるかもしれませんが、ある対象が自分に向かってくるとき、それを受け入れて同化しようとするか、壁を作って跳ね返すか、つまり外からのベクトル(刺激)に対しての魂の働きとし Sympathie と Antipathie そして、ある外の対象に対して、気持ちを向かわせるか、外側に自らを閉ざし内側に向けるか、つまり内側からのベクトルを外か内のどちらに向けるのが Lust と Unlust とい

うことになります。痛みは自分の内側に魂を向けた時に現れるもので、自分がいる現状を把握する働きを持っています。そういった意味で Leiden は Unlust との関係があるのです。自我を育てることに、まず自分がどこにいるのかを知ることが基礎となると思います。

看護は Lust

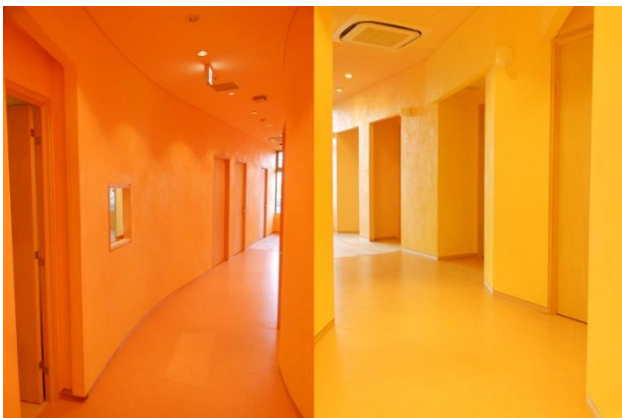
Lust という魂の働きをどのようにつくっていくかが治療にとってはとても大切なこととされます。それは、自らの外界に向かう力を働かせること。生きようという意思や外からやってくる治療という行為に対して快く自らを添わせることが大きな意味を持つからです。さらに Lust は未来に向かう力でもあります。自ら興味を持てるからこそ楽しいと思えます。真に楽しいと思えることは、たいていの場合過去に経験をしたことがないことです。これは自らを麻痺させるような悦楽ではありません。だからこそ Lust は未来に向かう力となるのです。それとは逆に知識は過去の側にあるもので、思考活動は過去に向かうものになります。「メソッド」と称して、表面の方法論だけを取り上げてしまえば、それはひとを過去に向かわせる力となってしまいます。過去は言わば個体や物質の側、つまり死の側です。知識とは事物の死骸なのです。ですからその反対に、生へ、そして未来へと向かう力こそが治療にとって、そして特に看護にとって、看護する側の意識としても、看護の目的としても Lust は大事なことと言えるでしょう。先ほど真に楽しいと思えることは過去に経験がなかったことであると申しあげましたが、それは遥か彼方の過去に対しても言えることなのです。ですから Lust はカルマに対する働きかけの力も持っています。カルマを解消するための働きかけは、Lust を通して魂に働きかけるしかないのです。ですから医療や教育に関わる建築として Lust を活性化させる空間をどう創るのか

ということが、私にとってもテーマとなっています。

比較に見て頂いた、そよかぜクリニックは、障壁を感じることなく滑らかに流れる動線を形成しています。そして所謂「見慣れた白い」空間が展開されています。白い空間を当たり前だと思っていると、ひだまりクリニックは異常な空間だと思うかも知れません。皆さんは白い空間と色のある空間を体験して何を感じましたか？

そよかぜクリニックの方は、フラットな感じ。

気持ちもフラット。>
<ひだまりクリニックの方は、形も色も動きがあってそれに影響されて自分がじっとしていない>
<ひだまりクリニックの方が、動きが大きい>
良く感覚を反芻してください。印象として言葉にしたそれが本当の感覚体験なのか、今までの知識や経験の中から回答を求めてはいないかを。



ひだまりクリニック

左：美容皮膚科部門 右：アントロポゾフィー医療の部門

大切な中間領域

もう一つここで大事にしていることは、中間領域を設けるということです。ひだまりクリニックでは各診察室の入口前は天井も低いニッチ状の空間となっています。これが通路と診察室との間にある別の質を持つ空間、つまり空間と空間をつなぐ関節のような中間領域です。キャンプヒルの各寝室の前にも中間領域を設けていますが、この空間があ

ることで子どもたちの内的平静が準備され、全く生活が安定するのだそうです。別の行為をする場所に入る前に、つまり環境の変化に対し準備を内的にさせる場所が必ず必要で、ことに心的な障壁を抱えた子どもにとっては、特に重要で、その効果は顕著であると言えるでしょう。診察室前のニッチ部分は、入室が隠れた場所にあるという安心感を与える配慮でもあります。ニッチの部分で若干時間が止まる。それは神社の鳥居も同じような効果を持っています。個として医師と対峙する準備をするための空間です。

色とかたち

そよかぜクリニックとひだまりクリニックはお互いが助け合うものとして計画されていました。ですのでこの2つのクリニックの関係が空間構成でも暗示されています。火星と金星という言葉は両極の関係を2つの方向の異なる円弧の軸線が両者の間に流れるエントランス(風除通路)のほぼ中心で、お互いが手を伸ばして合わせるように、交わっています。患者さんが待っている時間は大事。患者さんが待っている時間をどう作るかを考えています。ひだまりクリニックのレセプションカウンターの形状は、オイリュトミーで言う「B音」の形、「抱く」かたちになっています。そよかぜクリニックのそれは、よく見られる円弧の凸側が来院者に向かう形状です。ドイツのアントロポゾフィーの病院でも、これと同じような形状だったりしますが、本当は来訪者を包むような凹面「B音」のかたちは、他者を抱くかたちですから、不安を抱えて来ている人には安心感を与えるでしょう。だからこそこで暖かく笑顔で対応するスタッフの振る舞いも重要です。機能的には後ろを通る人にとっても、受付に立っている人が邪魔にはなりません。この受付カウンターは濃い赤ですが、ブビンガという南洋材を使っています。ここにも火星のモチーフが使われているわけです。

4つの診察室の色は覚えていますか？一番奥は、ラベンダー(赤みがかかった青)色で、ほかに黄

色系、石竹色、シャガの花のような色です。部屋の形状は矩形でそれほど変わりませんが、色は部屋ごとに変えています。入った感じはどうですか？部屋に入って、扉を閉めて感じてみてください。青紫の部屋は自分の重心が落ちてくる感じがしないでしょうか。単純に色だけの効果とは言えませんが、このような質の空間は、受肉していない、自分の体の中に入り切れていない人は、この青紫(ラベンダー)のような空間の方が暖色系の空間より落ち着いてセッションを受けられるようです。次の山吹色の空間は、その逆。黄色とかオレンジ。シュタイナー学校ですと、一般的には1年生には暖色の赤系の教室とし、徐々に寒色系に向かい、最後の12年生では温かみを持った青系としての青紫のような色を空間に与えます。しかし現状をよく見ますと今の子ども達はシュタイナー学校創設時の100年前とは大分変わってきているように思います。最近の子どもを見ると受肉していないと言えるような子どもが多いので、私の場合は、赤よりも前に、色として12年間の色彩円環を赤紫から始めて青紫で終えるようにしています。シュタイナーは3つの学校のためにカラーチャートを作っていますが、最初のシュタイナー学校である Ulandhöhe の教室に対しては紫の変容として赤紫から青紫を各教室に与えています。その後の建築家の試行錯誤が現在よく見られる虹の7色を教室に使うようになっていて、その試行錯誤はいまだに続いていると言えます。

色はその性格として既にヴォリュームと動きを持っています。ですので、色を空間に与える時には形の性格を知ったうえで行わなくてはなりません。例えば、シュタイナー学校では明黄色を廊下には使いますが教室には殆ど使いません。明黄色は本来動きの大きな色で、細長い色と言ってもいいと思います。ですので、細長い廊下の空間に使用すれば流れやすい空間になりますが、教室には静けさが必要です。ひだまりクリニックもエントランスホールは少しオレンジがかった黄色で、それに対して廊下は動

きを即す鮮やかな黄色に変化しています。まずエントランスホールは来訪者を暖かく受け入れるような空間感情を創るために、円弧状の壁で奥に空間を動かし、ふくらみのある中心を持った色によって、移動空間よりも留まる空間にしています。

玄関に面したこの壁にはオレンジ色の違和感を覚えるような模様を入れていますが、言わば痛み体験といった表現です。これは自分の現在点を意識するときに伴う感覚でもあります。ことに自我に起因するといわれる現代病と関わる人が多いであろうひだまりクリニックでは自我の体験を考えなくてはなりません。



ひだまりクリニック：レーザー使用室

美容皮膚科部門では、レーザーを使う部屋は、施術による炎症を考慮して主に寒色系の空間としています。炎症系の病気に対しては寒色系の空間という考えをここでも踏襲しています。浴室の場合はオイルバスなど長時間の入浴を考慮して寒色系の空間としています。住宅でも浴室は寒色にしています。寒色のほうが入浴中の呼吸が穏やかになるように思うからです。



ひだまりクリニック

左:アインライビングをおこなう部屋

右:治療用浴室(奥)養生室兼脱衣室(手前)

色光療法の部屋だけは、その治療方法の性格上白い空間としています。色彩のある空間に暫くいた後に、その白い部屋に入ったときにその空間を「きつい」と感じませんでしたか？いつも白い空間で過ごしていて、それが当たり前と思っていると何の印象も持てないかもしれません。思考至上主義の現代、私達は感覚が鈍くなっているとも言えますが、白という色は全ての光を反射するので、反感が強いとも言えます。悟性を中心にした科学や合理性、経済性が唯一の尺度の様になっている現代のありかたを白い空間の多用は非常によく表していると思いますが、白が建築のなかで中心的な色となり始めたのは、おそらく1930年頃だと思います。白は本来とてもきつい色です。日本の歴史の中でも真っ白な部屋を見つけるのは難しいと思います。寺院や城などにしても、襖絵があり、天井画があり、畳も色がありますし、土壁は様々な色彩を持った土で作られていました。白い空間は、1910年に近代建築の曙があり、多くの要素が装飾として建築から分離され、合理的な建築が進められる中でインターナショナルスタイルと言われる様式ができたのがこの1930年代という時代です。エアコン、嵌殺窓(はめごろしまど)のミラーガラスによるファサードなどが登場するのもこの頃です。あらゆる要素を等価なものとしてとらえ、屋根も各階の床の板と

等価として、平らな屋根(陸屋根)も時代のシンボルとして市域とは関係なく現れました。問題は一人ひとりを如何に捉えるかではなく、不特定多数の人間をひとつの塊として、アノニマスなものとして取り扱う、ひとつの象徴の様に白い空間が作られるようになったのではないかと思います。ですから一人ひとりに対峙する治療にとって、白い空間はその意図を表せないように思います。治療に対する個性(自我の表出)をもって、個と個がぶつかるところで、初めて治療は行われていくように思います。教育は行われていく。ぶつかることを恐れない。対話はお互い個性がないとできない。その個性というのが重要。シェークスピアにしてもゲーテにしても、時を超え文化の差異を超えて、多くの人に理解され、感動を与えられるのは、個性が立っているからこそなのです。個性というのは時代に負けるものではなく、それが本質を表現する器であったのなら時代や文化を超えて、人間をつなげることができるものです。



そよかぜクリニック：ホール

※後半は、会報秋号(9月頃発行予定)に掲載いたします。